

りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年八月第三号

唯然^{ゆゐねん} やや、しかなりーそうです

ご讃題 (Ref『仏説無量寿経 発起序』註釈版聖典 P8)

尊者阿難、仏の聖旨^{しょうし}を承けてすなはち座より起ちて、ひとへに右の肩^{かたぬ}を袒^{じょうきがつしやう}ぎ、長跪合掌して、仏にまうしてまうさく、「今日世尊、諸根悦予し、姿色清浄にして光顔巍々とましますこと、……(中略)……殊妙なること今のごとくましますをば、やや、しかなり、大聖、われ心に念言すらく、今日世尊、希徳の法に住したまへり、今日世雄、仏の所住に住したまへり、…

一、仏の聖旨^{しょうし}(みこころ)を承けて

ご讃題は、無量寿経が今まさに説かれようとする有様を示す一節であります。

王舎城の耆闍崛山の会座には一万二千に上るお釈迦様のお弟子様をはじめ、無数のお浄土の菩薩様方が一時にお集まりになっていました。

そのとき、世尊^{せそん}(お釈迦様)はご機嫌いとうるわしく、お姿も清らか、輝かしいお顔がひとしお気高く拝されたのであります。

そこで、お弟子の阿南尊者^{あなんそんじや}は、世尊の聖旨をよくいただいて座よりたち、右肩を脱いで地にひざまずき、うやうやしく合掌して世尊にお尋ね申し上げられたことであります。

「世尊、あなたは今日、ご様子が格別うるわしくおわして、丁度明鏡の透き通ってみえるようでございます。

みいず(お顔)がこの上もなく輝いておいでになります。

リビングライブズー「唯然 やや、しかなりーそうです」

私は今日までこんな尊いお姿を拝したことがございません。

そうです、わたくしが思いますのに、

今日の世尊は、特に優れた禅定に入っただけでおいでになります。

また、仏みずからの悟りの境界に安んじておいでになります。

また、衆生の導師としてのお徳を備えておいでになります。

また、最勝の智慧の道に住しておいでになります。

そしてまた、如来のまことの徳を行じておいでになります。

私が聞いていますのに、過去・未来・現在の仏がたは、たがいに念じあわれるということではありますが、いま、世尊もまたそのとおりに、諸仏を念じなさらぬはずはないと思いますが、いかがでしょう。

でなければ、なぜ世尊のみいずがこんなに神々しくかがやいておいでになるのでしょうか。」(Ref『聖典意訳 浄土三部経』P8)

世尊のお姿が常にも増してかがやいて見えたというのが、浄土三部経の中心になる大無量寿経が開かれたそもそものきっかけであります。

阿南尊者は、世尊の聖旨を戴いてお尋ねになったことであります。

面白いのは、「**そうです**」という意識の部分であります。

もとの漢文では「唯然^{ゆゐねん}」の二文字で示されており、その読み下し文では「**やや、しかなり**」とあります。

註釈版聖典には、「やや」は、相手に恭順の意を示しつつ応諾する語で「はい、そうです」と仏の聖旨に随順する語と註書が施されています。

でも、**仏の聖旨(みこころ)をうけてとあるのは、釈尊が阿南にお言葉を発せられたことをうけたものではありません。**

そのことは、このすぐ後に世尊が阿南の発した問いに対して、「それは諸

天に教えられて判ったのかどうか」とお尋ねになったことから判ります。

阿南尊者は、答えます。

「いいえ世尊、私は別に諸天(かみがみ)に教えられてお尋ねしたのではなく、まったく自発的におたずねしたのでございます」と

これに対して、世尊は、

「如来は無上の大悲をもって迷いの衆生を哀れみ給うので、世におでましになって広くもろもろの教えを説かれるわけは、衆生を救うためにまことの利益を恵みたいとおぼしめされるからである。

こういう仏のお出ましに会うことは無量の永劫(とてつもなく長い時間のこと)を経てもなかなかおぼつかないのであって、丁度、優曇華の華が咲くことのきわめて希(三千年に一度だけ咲く)なようである。」

とおっしゃったのであります。

ただでさえ尊い世尊のお姿が常ならぬ程輝いて見えることに驚いた阿南尊者が、誰に教えられることもなく、自らの自発的感動を以てそのいわれを表現しておたずねしたのであります。

お尋ねするにあたって、その内容をまず確認するときの言葉が「唯然」なのであります。

私は思うのです。漢字の「唯然」に発し、「やや、しかなり」と読み下し、更にこれを「そうです」と意識する。

なんと尊いお言葉の系譜でありましょうや。

「そうです」は、浄土真宗が、まさにここから始まったと言ってもよい大経開説の深い感動が秘められたひとことであります。

「唯然」の二文字自体が浄土真宗では大切な言葉であります。

リビングライブズー「唯然 やや、しかなりーそうです」

因みに、この言葉そのものの意味を尋ねてみますと言うと

「唯」は、ただこのことひとつといふ」とあり(Ref『唯信抄文意』、註釈版 P699)、「然」といふは、しからしむということばなり、しからしむといふは、行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるがゆゑに法爾(法のまんま、そのまま)という」と示されてあります(Ref『自然法爾の事』、註釈版初版 P768)。

察するところ「唯然」とは、行者のはからいによるものではなく、法の示すままであって、他に何らの要素が全く加わらない状態、如実のありさまを指すことが知られます。

真実の世界、浄土がこの娑婆世界を包んで言葉を超えた言葉で自らを顕わしているその姿に見入っている言葉だといわざるをえません。

まことに「そうです」は、阿弥陀如来が釈尊と一体となってお姿を現し給うたのを見てとった阿南尊者自らの確認の言葉でありました。合掌(後書き)去る六月二三日、「本願の名号をきくとのたまへるなり」(一念多念文意)は、如来の仰せに宗祖ご自身が聞き入っていらっしゃるお姿を彷彿させるのですが、いかがでしょう。」とお尋ねしたのに対して、梯 實圓和上は、唯一言「そうです」とお応え遊ばしたことであります。

まことに、「そうです」は、今年、私にとって忘れることのできない如来様直々の御言葉でありました。合掌

お盆のご法座(兼前坊守百ヶ日法要)八月十五日十一時より
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二〇 〇五〇 一大津市北小松四五番地 ☎&Fax 0.七七 五九六 〇一六六
☎-📧 mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥

平成二十一年七月二十八日初版発行、二十一年七月三十日 改訂版 2